

〈研究ノート〉

# ヨブの苦難と変容

— 『ヨブ記』の死生観と編者の意図—

渡辺 和子

はじめに

『旧約聖書』のなかでは「知恵文学」とされる『ヨブ記』は、古代文学の中でも特異な位置を占める作品の1つである。その特異性をどこに見出すかは読者によって異なるであろうし、また読む時期によっても違う印象を受けるといことは他の作品の場合と同様である。

ここでは特にヨブの変容と死生観の表出という観点から『ヨブ記』再読を試みてみたい。聖書本文の引用は基本的に新共同訳（日本聖書協会、1987年）に依拠するが、必要に応じて異なる訳も参照する。

## 1. 『ヨブ記』の構成

『ヨブ記』がいつごろ成立したかは定かではなく、多くの解説書でも前5世紀ころと推測されている。しかし『ヨブ記』の内容と構成から、長い宗教的、思想的、文学的伝統を背景にしていること、そして最終形に至るまでに長期に亘る編集作業がなされたことが窺える。

『ヨブ記』の構成は広く認められているように、中心部分に韻文の会話劇が「本幕」として置かれ、その前後に、会話を含む散文の「序幕」と「終幕」が置かれている。しかし、このような「序幕」「本幕」「終幕」の3部構成がなされた後にも、少なくとも「エリフの言葉」（32-37章）の加筆があったと考えてよいであろう（渡辺2008, 74-75頁参照）。

- I. 序幕 1章-2章
- II. 本幕 3章-42章6節
  - a. ヨブの嘆き 3章

- b. ヨブと友人3人の議論 4-27章  
第1巡 4-14章、第2巡 15-21章、第3巡 22-27章
  - c. 神の知恵の賛美 28章
  - d. 神に対するヨブの訴え 29-31章
  - e. エリフの言葉 32-37章 (後代の加筆)
  - f. 神とヨブの問答 38章-42章6節
- III. 終幕 42章7-17節

## 2. 本幕と序幕・終幕と「エリフの言葉」

本幕は登場人物（あるいは神）の会話で構成されており、「ト書き」、すなわち、話者が変わるとに「…は答えた」という挿入句以外は、直接話法で書かれている。しかしこの直接話法のなかには固有名詞は見られない。会話では「わたし」「あなた（たち）」「お前」などによって互いに呼びかけている。

後代の「エリフの言葉」は、さらに散文の「序文」(32:1-6)と韻文の「エリフの発言」(32:6-37:24)に分けられる。その「序文」のなかにはエリフの紹介のほかには固有名詞はヨブだけであり、ヨブの友人たちの名は挙げられていない。韻文の「エリフの発言」のなかでもヨブだけが固有名詞として次のように出現する。

「あなたたちのなかにはヨブを言い伏せ彼の言葉に反論しうるものがない」(32:12)。

「ヨブはわたしに対して議論したのではないがわたしはあなたたちのような論法で答えようとは思わない」(32:14)。

「ヨブよ」(33:1a; 33:31a; 37:14a)。

「ヨブはこう言っている」(34:5a)。

「ヨブのような男がいるだろうか」(34:7a)。

「ヨブはよく分かって話しているのではない」(34:35a)。

「悪人のような答え方をヨブはする」(34:36a)。

「ヨブは空しく口数を増し」(35:16a)。

このように、「エリフの言葉」では、ヨブという名の人物に呼びかけるこ

とから、同じ韻文である本幕と「エリフの言葉」の由来と成立時は、異なっていると想定できる。厳密には、「エリフの言葉」の「序文」では「ヨブの3人の友人」(32:3a)とあるが、「エリフの発言」のなかではヨブの論敵が複数であることはわかるが、3人とは言われていない。

いずれにしても、「エリフの言葉」の加筆者は、ヨブという人物が、複数の相手と議論する「序幕」「本幕」「終幕」の構成をもつ文書を見て、それをまねる形で、散文の「序文」と韻文の「エリフの発言」からなる「エリフの言葉」を加筆したと考えられる(並木2013, 43にも同様の見解がある)。あるいはその加筆者は何かの都合で31章までの『ヨブ記』を見ることができて、それに書き足したのかもしれない。このように「エリフの発言」成立経緯も内容も十分に興味深いが、今回は扱わない。

### 3. 本幕の構成

上述した事情から、『ヨブ記』の本幕には、元来固有名詞が欠けていた可能性が高い。そして序幕と終幕を加えた編者が、本幕の会話劇に話者の名前を与えた、すなわち、ト書きを書き足したとみてとることが可能である。ヨブと友人たちの議論の順序は次ようになっている。①、②、・・・の数字は通算で何回目の発言かを示す。

第1巡の議論…	ヨブ① (3章)	—友人1-① (4-5章) —
	ヨブ② (6-7章)	—友人2-① (8章) —
	ヨブ③ (9-10章)	—友人3-① (11章)。
第2巡の議論…	ヨブ④ (12-14章)	—友人1-② (15章) —
	ヨブ⑤ (16-17章)	—友人2-② (18章) —
	ヨブ⑥ (19章)	—友人3-② (20章)。
第3巡の議論…	ヨブ⑦ (21章)	—友人1-③ (22章) —
	ヨブ⑧ (23-24章)	—友人2-③ (25章) —
	ヨブ⑨ (26-27章)。	

このように整理してみると、語る回数と長さによつて次のような違いがあることがわかる。

- ヨブ 計9回、計15章（1巡ごとに5章）。  
友人1 計3回、計4章。  
友人2 計3回、計3章。  
友人3 計2回、計2章

しかし内容から考えても、友人の数が3人である必要はない。交互に語るのであり、たとえ友人が一人であってもヨブとの対話は成り立つことになる。

## 4. 序幕

序幕と終幕をつけて『ヨブ記』を編集したであろう編者を想定してみる。そしてその編者にはどのような意図をもっていたかを考えてみる。

本幕は第1巡の議論の冒頭であり、誰かが自分が生まれた日を呪うヨブの語り（3:1-19）で始まる。この内容も強烈であるが、序幕をつけるためには、本幕をよく読み込んで、生まれた日を呪う人物が、その状況に置かれる前には、どのような人生を、何を考えて送っていたのかを思い描く必要がある。序幕と本幕の内容を精密に比較するならば、矛盾がないわけではないが、かなりの程度の一貫性は意図されており、極めて興味深い序幕となっている。

従って『ヨブ記』理解のためには、虚心坦懐に本幕を精読し、主人公の来歴を想像するという作業が役に立つに違いない。それは『ヨブ記』を普通に最初から最後までを順に読み進める時とは、大いに異なる読後感をもつことになるのではないか。

### 4.1. ヨブの紹介

ヨブは寓話の主人公のように、現実にはあり得ない「絵に描いたような」、無垢で正しく、東の国一番の富豪として紹介される（1:1-3）。家族については「7人の息子と3人の娘を持つ」（1:2）とされるが、これも当時の人々の理想の家族像であったと思われる。しかしここで「妻」は紹介されていない。

次に、ヨブの性格、考え方、生き方を示すものとして、家族の暮らしぶり  
の一端が披露される。7人の息子たちはすでに成人し、それぞれの家を構え  
ているようである。3人の姉妹はまだ両親とともに住んでいるのであろうか。  
いずれにしても「息子たちはそれぞれ順番に、自分の家で宴会の用意をし、  
3人の姉妹も招いて食事をすることにしていた」(1:4)。この兄弟姉妹の食  
事会がどのような頻度で行われたかは記されていない。次に、息子たちに対  
するヨブの行動が次のように説明される。

<sup>5</sup> この宴会が一巡りするごとに、ヨブは息子たちを呼び寄せて聖別し、  
朝早くから彼らの数に相当するいけにえをささげた。<sup>6</sup> 「息子たちが罪  
を犯し、心の中で神を呪ったかもしれない」(אולי חטאו בני וברכו אלהים  
בלבבם) と思ったからである。ヨブはいつもこのようにした (1:5-6、  
下線渡辺)。

災難にあう前のヨブの生き方を示すものは実にこの箇所だけである。最後の  
文章から、ヨブは、息子たちの「聖別」と「いけにえ」を定期的に行ってい  
た。すなわち、「判で押したような」生活ができる人、あるいはそうしない  
と不安になる人であったと思われる。しかし、そうする理由が何であるか  
についてはよく検討する必要がある。

息子たちが罪を犯したのであれば、「聖別」も「いけにえ」も必要であつ  
たかもしれないが、ヨブはその確認はしていない。すでに罪を犯した可能性  
を想定して、罰を前もって避けるために神にささげものをするることによつて  
家族の幸せを守ろうとする行動であり、それが習慣化していたことになる。  
ヨブは息子たちが「おそらくは」(אולי) 罪を犯したかもしれないと疑うが、  
それを確かめないことも習慣化していた。ヨブが想定した罪の内容は、「心  
の中で神を呪った」ことであるが、この「呪った」は語根 \*brk (ברך) のピ  
エルであり、「祝福する」という意味を持つ。しかし、ここで「神を祝福す  
る」と解しては罪を犯したことにはならないので、「神を呪う」と真逆の「意  
訳」がなされる慣例がある。

やや特異なこの動詞は『ヨブ記』の序幕のなかで6回 (1:5; 1:10; 1:11;  
1:21; 2:5; 2:9) 使用されている。そのうち「祝福する、讃える」の意味で  
訳しても違和感がないのは2回 (1:10; 1:21) だけである。筆者はこの問題

についてすでに一つの解決策を提案した（渡辺 2008, 83-86 頁参照）。「祝福する」が「呪う」の婉曲用法ではなく、双方に共通している「願う、祈る」の意味が重要である。この動詞の意味としては「(心のままに、自分勝手なことを) 願う」と解することが可能ではないか。自分勝手な願いや祈りは、別の観点からは罪深いと判断され得るものである。

#### 4.2. 神とサタンとヨブの災難

ヨブの生活の一端が紹介されたあと、場面は突然ヤハウエの前での「神の使いたち」（文字通りには「神の子ら」1:6）の集まりとなる。そこにサタンも来るが、ヤハウエの方からサタンに語りかけ、ヨブのことを話題にし、ヨブの比類なき義人ぶりをほめる（1:8）。サタンはそれに答えて、ヨブが神を畏れるのは見返りがあるからであり、ヨブの財産が失われるならば彼は「面と向かって（על־פניך）あなたを呪うに違いない（יברכך）」（1:11b、下線渡辺）、すなわち「面と向かって心のままに願うであろう」と答える。

ヨブに災いをもたらすことをサタンに許す神の意図は明確にされていないが、序幕を付ける編者としては、本幕の冒頭において「生まれた日を呪う」（3:1）ほどになる人物の動機を考えなければならない。なお、この本幕での「呪う」（語根は \*qll (קלל)）の場合は、「呪う」としか訳せない。

神はサタンにヨブに災いをもたらすことを許すが、「彼に手を伸ばす」ことだけは禁じられる（1:12）。サタンは、神の言いつけを忠実に守りながら、ヨブのすべての財産と息子娘の全員を失わせてしまう。しかし「このような時にも、ヨブは神を非難（תפלה）<sup>1)</sup>することなく、罪を犯さなかった」（1:22）という編者の説明が入る。

また別の日のヤハウエの前の神の使いたちの集まりが開催される（2:1-6）。そこでも同じようなヤハウエとサタンのやり取りがある。サタンは新たにヨブの健康を奪うことを提言し、神の許可を得る。神が付けた条件は、ヨブの「命（נפש）は守れ」（2:6b）であった。再びサタンは神の言いつけを守り、ヨブを全身のできもの（שחין）で苦しめた。

ここで突然、ヨブの妻が登場してただ一度の台詞を言う。自らに非がないことに固執するヨブに対して「神に心のままに願って死になさい」（2:9b）と言う。新共同訳では「神を呪って死ぬ方がましでしょう」となっているが、このような訳し方の背景には、おおむねヨブの妻を悪妻とし、サタンの

側にあるとする主流の伝統がある。

しかしヨブは「私たちは、神から幸福をいただいたのだから、不幸もただこうではないか」と答え、編者はそれに続けて「このようになって、彼は唇をもって罪を犯すことをしなかった」という説明を加える (2:10b)。ここであえて「唇をもって」と言い添えられていることは重要である。ヨブの言葉が本心からではないことを暗示しているからである。

その後、序幕の終盤となり、ヨブの3人の友人が見舞いに来るが、ヨブの状態のひどさを嘆いて「7日7晩」話しかけることもできなかった (2:11-13)。そして本幕が始まり、いきなりヨブが自分の生まれた日を呪うということは、この「7日7晩」の沈黙がヨブを以前よりも正直にさせたことになる。これも序幕を付した編者の重要な意図といえる。

## 5. 生命観・死生観

ヨブは生まれた日を呪う (\**qll*) (3:3-10a) だけでなく、胎内で死ねばよかった (3:11)、さらに生まれた直後に死ねばよかった (3:10b-12) という。その理由は、死後は誰もが「憩いを得て眠り」 (3:13b) につく場所に行くという死後世界観にある。

そこでは神に逆らう者も暴れまわることをやめ  
疲れた者も憩を得  
捕われ人も、共にやすらぎ  
追い使う者の声はもう聞こえない。  
そこには小さい人も大きい人も共にいて  
奴隷も主人から自由になる (3: 17-19)。

これは一つのユートピアでもある。また、ヨブは次のようにも言う。

人は死んでしまえばもう生きなくてもよいのです (「ヨブ記」 14:14)。

ここで自死という選択肢はないのかという疑問がわくが、『ヨブ記』全体を通してその選択肢には言及されていない。その理由はおそらく、神から命

を与えられた人間は自分の力でそれをなくすることができないからであろう。もし、序幕に登場したサタンに命を奪う許可が与えられたならばヨブが死ぬことも可能であったかもしれない。いずれにしても神の許可があって初めて死ぬるとなれば、死は神に願って与えてもらうほかはない。ヨブは「私の命 (חיי) は風 (רוח) にすぎない」(7:7b) と言うが、次のように言う。

神よ、私の願い (שאלתי) をかなえ  
望み (תקותי) の通りにしてください。  
神よ、どうかわたしを打ち砕き  
御手を下し、滅ぼしてください (6:8-9)。

序幕における妻の言葉も、神に願うほかに死ぬ手段はないという生命観から出ているのであり、その意味では本幕の生命観と共通している。

## 6. ヨブの証言

本幕のヨブは、序幕のヨブと比較するならば、大いに変容を遂げたことがわかる。友人たちと語り合ううちにますます内面の怒りを表現するようになってゆく。ヨブは正直に心情を吐露するようになったわけであるが、それとの対比において序幕のヨブの偽善的な生き方も映し出されてくる。

このようなヨブの変容をヨブにもたらしたのは、因果応報説をふりまわす友人たちのおかげということになる。決して傾聴に徹しない友人たちは悪いカウンセラーの見本のようなものであるが、ヨブには効き目があった。序幕のヨブも因果応報論者であったかもしれない。ヨブは、以前であれば友人たちのような論を展開したからこそ、なおのこと苛立つのではないか。しかし厳密には、序幕のヨブは息子たちの罪の有無を問うことなく、神に前もって贈り物をするような人生を送っていたのであり、因果応報論者ですらなかつたともいえる。

ヨブは変容した結果、自分にも他人にも正直になり、友人たちに「黙ってくれ」(13:5a) と言い、自らの真の論敵を神とする。正しい事だけをしてきた自分に災いが降りかかったことが受け入れがたいのは、かつては序幕に描かれたように極めて幸福であったからかもしれない。しかしそれ以上に、



どんな生き様であっても、人間はすべて同じ死後の世界で眠りにつくことを信じているために、妥協することなく神を問い詰めたいと考えたことになる。またそこで、自らを原告とし、神を被告とするならば、一体誰が裁きの座に就き、また証人となり、仲裁者となるのかという深刻な問題も生じてくる (9:14-35)。

それでもヨブは、あたかも法廷に立ったかのような証言に踏み切る (31章)。証言とは過去の事実について誓うことであり、「もし…」という条件節で始まり、その帰結節は自らに災いが下されることを是認するという「自己呪詛」を内容とする。残念ながら新共同訳では条件節が正しく訳出されず、たとえば次の例のように記されている。

わたしがむなしいものと共に歩き  
 この足が欺きの道を急いだことは、決してない。  
 もしあるというなら  
 正義を秤として量ってもらいたい。  
 神にわたしの潔白を知っていただきたい (31:5-6)。

しかし、この証言の前半は書いてある通りに「もし (𐤎𐤍) わたしがむなしいものと共に歩き、この足が欺きの道を急いだことがあるならば」という条件節として訳出すべきである (傍線渡辺)。「もしあるというなら」を加えなければ次の帰結文にうまく続かないことになっても、伝統的なヘブライ語文法 (Gesenius 1909, §149) に基づく訳し方になっている。すなわち、誓いの表現では、自己呪詛を内容とする帰結文がしばしば省略されるために、条件節の「もし」を取り、肯定と否定を逆にして訳すとするものである。しかし本来はこのような条件節と帰結節の組み合わせが当時の法廷で用いられた証言形式であったと考えられる (渡辺 1991 参照)。またこのような証言は、命がけであるからこそ、内容が虚偽ではないことになる。

ヨブが命を賭しても自らの潔白を証明したいと願うのは、前述したように誰もが同じ死後世界に行くからであるが、それは当時まだ「死後審判」の思想が導入されていなかったことによる。後のキリスト教にも取り入れられた「最後の審判」の教義もペルシャに生まれたゾロアスター教に遡ると考えられる。

## 7. 神の答えとヨブの答え

ついに神はヨブに答える。その多くはヨブに問いただすものであり、内容は宇宙のなりたち、天候、野生動物、植物などについてである。もちろんヨブは答えられないのであるが、1回目には短く答え（40:4-5）、2回目の答え（42:2-6）の中で次のように言う。

あなたのことを耳にしてはおりました。

しかし今、この目であなたを仰ぎ見ます（42:5）。

これは「見神体験」といえる。「耳にする」だけの神は、誰かに言葉で教えられた神のあり方で、ヨブはそれを神と違って仕えてきたことになる。しかし、今「目で見ると」神は、かなり異なる神であったことになる。

C. G. ユングはヨブの答えが心からのものであると信じていない。ユングにとっては、この神はあまりに「無意識的」であり、野蛮で非道である。そのため、神が人間として生まれ、死すべき人間を体験し、神が忠実な僕ヨブしもべに耐え忍ばせたことを自ら経験する瞬間に、彼の人間的な存在は神性を獲得する。そのことによって「ヨブへの答えが得られる」と述べる。<sup>2)</sup>

しかし、序幕・終幕を本幕よりあとの編集作業によるものとしてとらえるならば、確かに本幕も完全な「一枚岩」ではないが、それでもヨブの苦しみ、友人たちとの議論による論点の移動、ヨブの変容、そして結末としての「見神体験」があり、一つのまとまりをなす作品であるといえる。その本幕に新しい意味を与え、文字通り劇的な序幕・終幕を付した編者がいたことになる。

## 8. 「真の媒介者」への変容

最後に再び散文の終幕があるが、序幕との類似性が高く、同じ編者によるものと仮定する。ここではヤハウェが「友人1」のteman人エリファズに語りかける。その内容は、ヤハウェについて、ヨブのように正しく語らなかつたエリファズを含む3人の友人に怒っているの、自分たちのために雄牛7頭、雄羊7頭を引いてヨブのところに行き、ヨブに頼んでいけにえとしてさきぎてもらい、ヨブが彼らのために祈る（\*pll, ヒトパエル）こと

によって、彼らに罪を負わせないことにする、というものである。ここでは、友人たちも神の言葉を聞いたことになるが、その姿を「目で見た」とは言われていない。

友人たちに依頼されてヨブがいけにえをささげて祈ると、友人たちは許されて罰を受けずに済み、またヨブの幸福は戻され、以前の2倍の財産と、息子7人、娘3人を新たに得る。この終幕にはサタンは登場しない。妻についての言及はなく、非難的にはなっていない。新たに生まれたという10人の子どもたちを生んだのは同じ妻であろう。<sup>3)</sup>

序幕と終幕を比べるならば、ヨブの変容が明瞭になる。序幕では習慣的にいけにえを捧げるというヨブの神に対する関わり方に対して、終幕では友人たちが神に要求されてやってきて、それに応える形でいけにえをささげて祈ることによって、友人たちは罰を免れ、ヨブの幸せが戻される。その意味で、ヨブが真の媒介者となることができたのである。序幕と終幕の編者としては、本幕に表現されたヨブの苦しみと見神体験に至る過程を真の媒介者となるためのイニシエーションと位置付けて『ヨブ記』を編集したといえる。

もちろん本幕自体は本来別個の作品であったが、編集作業が全く加わっていない本幕の元の姿を完全に復元することはできない。しかし文学史の広い文脈の中では、古代メソポタミアのいわゆる論争文学の流れをくむものであろう。たとえば、「バビロニアの神義論」と現代の研究者が呼ぶアッカド語の作品では、匿名の「苦しむ者」とその「友」の間の対話が続き、最後に「苦しむ者」の神々への短い祈りが付されている (Oshima 2013 参照)。他方、序幕・終幕も明らかにヘブライ語文学の中心地よりも東に位置する文化の影響を受けている。たとえば攻め入る「カルデア人」はバビロニア人であり、友人の「ビルダド」(בלדד) はアッカド語の人名であればアピル・アダド (Apil-Adad 「アダド神 (天候神) の嫡男」の意) に相当すると考えられる。かつては、序幕と終幕に対して本幕の詩人が手を加えたとされたが (たとえば関根 1970, 2 頁参照)、文学史と編集の観点からは順序が逆である。

## 9. 再び「ヨブの妻」とその図像表現

前述したように、家族が紹介される序幕においてもヨブの妻は登場せず、ヨブが2回目の災難をうけた後で突然登場してたった1回の台詞を言う。

従来は「神を呪って死になさい」<sup>4)</sup>と訳されてきたために、たとえ家族の紹介場面で信心深く正しい妻として描かれていたとしても、削除された可能性がある。聖書学はよく「後代の加筆」を指摘するが、「後代の削除」の方は論証が難しい。いずれにしても終幕においてヨブの妻は責められることなく、いけにえの必要もなくヨブとともに再び幸せになったようである。

ヨブの妻の図像表現には2種類がある。一つはヨブの妻を悪妻とするもので、サタンと一緒に「ヨブをいたぶる妻」を表す多くの図像が数多くある(細田2009, 171-183参照)。もう一つは、常にヨブの傍らに控える妻の姿も示す図像である。後者は、別の伝承に基づくものと考えられるが、おそらくそれは『ヨブ記』の七十人訳(『旧約聖書』のギリシア語訳)に遡る。ここではヨブの妻の台詞が「主に何かを言って死になさい」とされるが、それを言う前に彼女が辛い思いを抱えていることを吐露する言葉が並べられている。<sup>5)</sup> またその内容は『ヨブの遺訓』第24章にも反映されている(土岐訳1979, 393-395頁参照)。

また七十人訳の流れをくむ伝承に基づくと思われるのが、ウィリアム・ブレイク(William Blake, 1757-1827年)による『ヨブ記』の一連の挿画である。銅版画(図1-3参照)と彩色画(本書のカバー参照)があるが、どちらもヨブの側には妻が寄り添っている。



図1 「正しい人が嘲笑される」。銅版画。W. ブレイク作。



図2 「主はつむじ風の中から答えた」(38:1)。銅版画。W. ブレイク作。

## おわりに

『ヨブ記』には編集作業が施されているが、かなりの一貫性も保持されている。ヨブは友人たちと、そして神と徹底的に向き合いながら、最終的には自分自身と向き合って変容を遂げてゆく。ヨブの徹底したこだわりは、彼自身の篤い信仰心の故でもあるが、死後に審判はなく、生前の正さも信仰心も問われることなく、誰もが同じ死後世界に行くという考えとの折り合いをつけられなかった故でもある。ヨブは自らの正義と生き方の問題と真剣に取り組んだ結果、神と出会い、答えを聞き、そして以前のヨブとは違って、論敵にたまたりなしをすることができるようになっていた。

また死後世界観だけではなく、生命観にも着目する必要がある。それは神から与えられた命を自分で消すことはできないという生命観である。生命観



図3 「そのとき、夜明けの星はこぞって喜び歌い、神の子らは皆、喜びの声をあげた」(38:7)。銅版画。W. ブレイクの作。

の詳述は別稿に譲るが、人間はどのように命を与えられ、どのように死んでゆかか知らない。言い換えれば、何が命であるか知らない。人間による自死の試みはたいてい身体を傷つけることよって行われる。それは短絡的行為かもしれない。身体そのものが命であれば、命が害されることになるが、もしそうでなければどうなるのか。いずれにしてもヨブにとっては自死の道はなかった。そのためヨブは辛く、遠い道のりではあったが、最後まで歩みきり、変容をとげた人間の姿を今日に伝える主人公でもあり続けている。

## 注

- 1) この「非難」の語も語源的に「祈り」と関係するが、ここでは詳論しない。
- 2) ユング 1988, 73 頁。渡辺 2007, 298 頁と注 64 参照。
- 3) ただし『ヨブの遺訓』では妻シティドスは途中で死んだことになっている(土岐詠)

1979, 410 頁参照)。

- 4) なお鈴木佳秀は、「神を呪って死ぬ方がましでしょう」という新共同訳をもとにして、次のように述べている。「(この) 言葉は逆説的である。妻なるが故に語りうる言葉である。唇をもって罪を犯すまいと頑張っていることが虚勢にすぎないのであれば、苦しんで生き続けるよりも、神を呪って死を迎えるほうが、人としては正直というものである。人間は、義において神の前に完全ではありえない。もっと人間らしく素直になりなさい、妻はそう言っているのである。見方を変えれば、これほど愛に満ちた、夫思いの言葉はない」(鈴木 1993, 340 頁)。このような解釈も興味深い。動詞 (\*brk) 「讃える／呪う」の 2 面性の問題が解決されていない。
- 5) <http://www.scripture4all.org/OnlineInterlinear/OTpdf/job42.pdf>

## 参考文献・資料

- 後藤光一郎訳 1970: 『ヨブ記』 関根正雄監修 『聖書の世界 第4巻 旧約IV』 講談社、107-201 頁、「解説」、429-431 頁。
- 狐野利久 1985: 『ブレイクの「ヨブ記」』 桐原書店。
- 鈴木佳秀 1993: 『旧約聖書の女性たち』 教文館。
- 関根正雄 1970: 『ヨブ記註解』 教文館。
- 土岐健治訳 1979: 『ヨブの遺訓』 『聖書外典偽典』 別巻 補遺 1、教文館。
- 並木浩一・勝村弘也 訳 2004: 『旧約聖書 XII ヨブ記 箴言』 岩波書店。
- 並木浩一 2013: 『並木浩一著作集 1 ヨブ記の全体像』 日本キリスト教団出版局。
- 細田あや子 2009: 「ヨブ夫妻の図像学—ヨブ記 2 章 9 節をめぐる—」 『経験としての聖書 聖書学論集 41 大貫隆教授献呈論文集』 リトン、171-198 頁。
- ユング、C. G. 1988: 『ヨブへの答え』 (林道義訳) みすず書房 (原著: C. G. Jung, *Antwort auf Hiob, Dritte, revidierte Auflage, Zürich 1952*)。
- 渡辺和子 1991: 「古代メソポタミアにおける誓いの表現」 『宗教研究』 291、114-116 頁。
- 2002: 「苦難の意味の転換—『ヨブ記』の神話論—」 『東洋英和女学院大学心理相談室紀要』 5、14-19 頁。
- 2007: 「キリスト教神話の「発展」—マリアとユダをめぐる—」 松村一男／山中弘編 『神話と現代』 宗教史学論叢 12、リトン、281-326 頁。
- 2008: 「『ヨブ記』—永遠の問いと答え—」 太田良子／原島正編 『私が出会った一冊の本』 新曜社、73-87 頁。
- Gesenius, W. 1909: *Hebräische Grammatik*, 28. Aufl., Leipzig.
- Oshima, T. 2013: *The Babylonian Theodicy*, State Archives of Assyria Cuneiform Texts 9, Helsinki.
- <http://www.ellopos.net/elpenor/greek-texts/septuagint/>